

# セクシュアリティ相談を聴くコツ

坊隆史 松本健輔

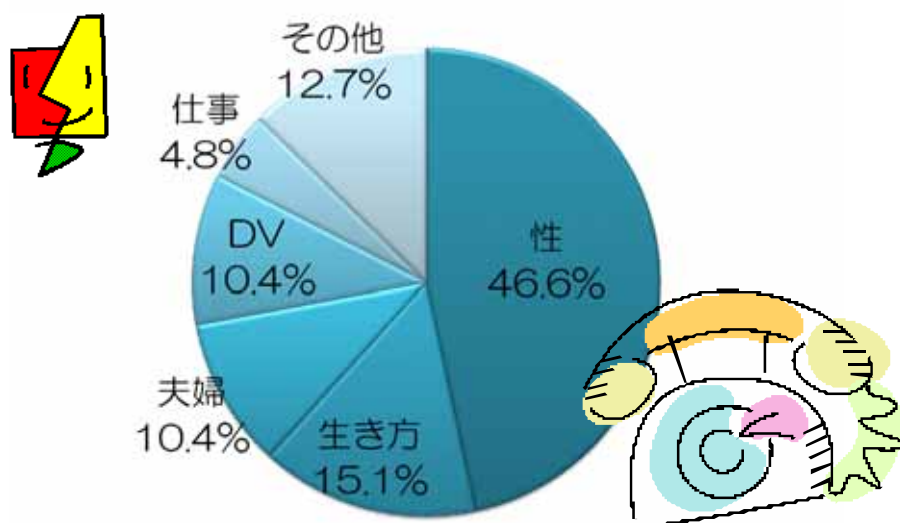
今回は男性相談とセクシュアリティについての基礎知識として、基本語句の整理と性に関する相談援助の基本的理念について述べた。今回は実践編として、事例と援助者の対応から男性セクシュアリティに関する援助について深めていく。繰り返しになるが、本連載は男性相談（男性の、男性における、男性のための相談）の立場から男性援助の実践を紹介するため、女性の援助者が同様の援助をしていくことは難しいかもしれない。その点をご留意願いたい。

## 1、男性相談における傾向

男性のセクシュアリティに関する相談は多いのだろうか。全国的な調査はほとんど見当たらないが、筆者（坊）が参加している本邦発の男性のための電話相談窓口である“『男』悩みのホットライン”の統計を紹介したい。

右の図は『男』悩みのホットラインの相談内訳である。相談としてカウントされた電話の半数近くが性についての相談である。民間団体ということ、匿名の電話相談ということもあるが、男性たちが相談先を求めているということも推察できる。内容は多岐にわたるが、大まかに分類すると、性器、

図、『男』悩みのホットライン 相談の内訳



実相談(1467件)の実績 16年間累計(2011年10月末)  
無言等 非相談(800件)はのぞく

性的嫌がらせ、性行為、性的指向、性的嗜好に関するものがある。こうした男性のための電話相談については、援助者の聴き方を含めて次回以降に紹介する。

## 2、事例からみるセクシュアリティ相談のコツ

ここからは典型事例を通して男性のセクシュアリティに関する相談のコツを紹介する。紹介する事例は実際にあった事例を組み合わせた架空事例であるが、相談のエッセンスは理解できるよう配慮しているのでご了承頂きたい。

コーラーまたはクライアントの発言は「**▲**」、ワーカーまたはカウンセラーの発言を「**△**」と区別している。

<Case1 A氏 30歳代後半 電話相談>

「**ここは何でも話していいのですか？**」

男性のための相談場面ではスタートとしてこのような前置きが多い。こうした前置きに対してワーカーは「**男性のお話でしたら、何を話されてもかまいませんよ**」と伝える。今回も同じように言葉を返すとA氏は次第に語り始めた。

「**あの…あれ…いわゆるアソコが……オチンチンが小さいんです**」

なかなか本題を話そうとしない。確かに性器を言葉にすることには抵抗があり、ためらってしまうことは理解できる。援助者も不慣れであれば双方が動揺するという状態に陥るので、性器に対する慣れは必要であろう。

「**小さいって、誰かに言われたの？**」

「**実は…中学生の時に、修学旅行のお風呂の時に同級生に股間を見られて『おまえ、チンチン小さいなあ』と言われたんです。それから卒業するまで何かと『小さい』と言われ続けました**」

語ろうとしない時は、コーラーが語り出すのを待ってもよいし、顕著にためらっているようであれば質問をしてもよいだろう。A氏の場合、ワーカーが一声かけたことで背中を押されたように語りだした。

「**それから自分に自信がなくなってしまい、引っ込み思案になってしまいました。大学に入学してから、周りがどんどん彼女をつくっているのに、自分はなぜだか勇気がわなくて…彼女ができたことなく今に至っています。だって彼女ができたならセックスをしないとイケないでしょ。『小さい』と言われるような気がして…、彼女をつくる勇気がわきません。おかげで結婚はおろか、その…恥ずかしいんですが…この年になっても、女性との経験がありません**」

A氏は堰を切ったように延々と胸の内を語り始めた。男性は喋らないイメージがあるが、「男は黙って耐える」という社会によって構築された“男の鎧”を

脱ぐと驚くように語ることができる。A氏も例外ではなかった。性器が小さいことよりも、それを出発点として性格および人間関係上の不全感をもって思春期や青年期を過ごしてしまったことが主訴であることが見えてきた。しかもA氏が語る内容には、男女交際は性交渉があるべき、男性がリードしなければならない、女性を満足させなければならない、といった伝統的な男性ジェンダーに支配されていることも推察された。

*<多感な時期に『オチンチンが小さい』なんて言われたら、傷つきますよね。すごくわかります。しかも、それからの人生にも影響が出ているのだから、あなたの傷つきは相当なものだとお見受けしました>*

ワーカーがA氏の思春期の傷つき体験、青年時代の異性関係について満足して過ごせなかったこと、それは今に至っていることの傷つきについて言語化したことでA氏の声が明るくなった。ここからは通常のカウンセリングのように傾聴を重ねた上で、伝統的な男性ジェンダーに縛られることなく自分らしく生きることでもできると指摘し、A氏らしい生き方を模索するための検討を行った。

*「これまでこんな想いを話したことがなかった。胸のつまりがなくなった気がします。また話を聴いてください」*

A氏は何かを見出したように、電話をかけてきた当初とは別人のような変化を見せて相談は終結した。

結局 Case1 では、コーラーの第一声が「性器が小さい」という訴えだったのに対し、性器の大きさに焦点をあてることなく終結した。この事例のように性器は男性相談の話題として頻繁に登場する。男性が性器について語った時、援助者は相談者の主訴が、性器そのものについてなのか、主訴を語るための伏線なのか、援助者を困らせるあるいは試そうとしているものなのか、または相談者自身の性的快楽を満たそうとしているのかを冷静にアセスメントする必要がある。そうしなければ表向きの主訴に攪乱されることもあろう。

Case1 の場合、性器が小さいことよりも、満たされない人生についての悩みが主題であり、性器の話題は「主訴を語るための伏線」であったと理解できよう。男性が性器について語る時、こうした視点をもって聴くことが求められる。

続いて事例を2つ続けて紹介する。ご自分ならどのように対応するかイメージしながら読み進めて頂きたい。

<Case2 B氏 40歳代>

*「痴漢を治したいんです。ストレスが溜まると通勤中に痴漢をしてしまう癖があって。先日、ついに現行犯逮捕されてしまいました。数日間拘留され、仕事も無断欠勤してしまい、家族や職場に多大な迷惑をかけてしまいました。幸い*

和解となり法的に裁かれることはなかったんですが、もう繰り返したくない。何とかしたくてあちこちの精神科を受診したのですが『ここでは痴漢の治療はできない』、『精神科は痴漢を治すところではない』と断られてばかりです。どうしたらいいものか… どこかいいところ（医療機関）をご存知でしょうか…」

<Case3 C氏 30歳代>

「私、ロリコンなんです。ロリコンであることに悩んでいるんです。大人の女性には全く興味がなくて、小学生くらいの女の子にはばかり興味があります。散歩をすると必ず公園に立ち寄って遊んでいる子どもたちを見ます。好みの子がいたりすると、つい連れて帰りたくなります。この前は思わず話かけてしまいました。

男性相談の現場では Case2 のように社会的および法的に逸脱した内容が語られることがある。さらには Case3 のようにこれから逸脱してしまいそうな危険性が高い相談が持ち込まれることもある。

こうした相談以外にも、聞くに耐え難い嗜好を語る男性がいる。明らかに非現実的でファンタジーを語ることで快感を得ていると見なした場合、あるいは援助者が傾聴できない内容の場合は相談を断ってもいいだろう。しかし、事実か虚構か判断がつきにくいように語る行為そのものが、男性の不器用さによる表現方法であると理解すれば、いささか傾聴しやすくなるものである。

性的嗜好は非常にデリケートな問題である。人は一つのことでも嗜好は多様であるのに関わらず、C氏のようにたまたま社会的に許容されない嗜好を持っていることで生き難さを感じている男性たちがいる。こうした逸脱的嗜好をもつ男性は、自らの嗜好を語ることさえ不自由しているのである。例えば<人にはいろいろな嗜好があるのに、あなたの嗜好がたまたま世間で許されないのは残念なことですね>という自分の嗜好が世間で許容されない無念さに沿いつつ、<好みの女の子が目の前にいるのによくガマンできましたね。大したものですよ>と欲求を抑制しているC氏を賞賛した上、<でも残念ながら、子どもに性的欲求をもつことは認められていません。子どもの性的な写真を持ち合わせることもすらも許されていません>と逸脱行動をとらないように釘をさしておくことも重要である。Case2のB氏に対しては、治療という手段をとらずに<金銭的余裕さえあれば、合法的に楽しめるサービスがある>と代替案を提示することもできる。性的嗜好の場合、倫理上の論理を伝えるだけでは相談として成立しないことも多い。合法的かつ現実的な選択肢を提示することで社会的逸脱行動を抑制させるように持ちかけた方が効果的なこともある。次の事例のような場

合はどうであろうか。

<Case4 D氏 60歳代>

「自分は妻が死別してから長年娘と二人で暮らしてきました。娘は残念ながら結婚にご縁がないまま適齢期を過ぎてしまいました。本人ももう結婚は諦めているようです。しかし性的な欲求はあるようで、マスターベーションらしき行為をしているようです。わかりやすい場所で行っており、自分を誘っているようにも思います。自分も妻と離婚してからご無沙汰です。父娘間で許されることではないとわかってはいますが、我慢できない自分もいます。抑えられない。今晚にでも禁を破ってしまうかもしれません。どうしたら良いでしょうか？」

Case4 の場合、「父娘で関係をもつことは道義上許されない」という道德上の説法だけでは相談者のニーズに応えられないであろう。＜誰にも迷惑がからず、双方同意のもとであれば仕方のないことが世の中にはあるかもしれない。しかしあなたの勝手な思い込みで行為に及ぶことは絶対に許されるものではない。またそういう関係が成立しても、外では話せないことだし、娘さんの人生を大きく変えてしまう可能性がある＞と念を入れておくことは必要であろう。これは援助者が父娘間の肉体関係をもつことを容認しているわけではない。あってはならないことだと明言した上で、「万が一」を想定した現実的な視点からの援助上のリスクマネジメントといえる。ここで留意する点は、援助者にとってはリスクマネジメントではあるが、その発言によって相談者が行為に及ぶことを許容していると感じさせないような言葉を選択することが重要である。

### 3、おわりに

いかがであったろうか。紹介した事例以外にも性的マイノリティで悩む相談など男性のセクシュアリティ相談は多種多様である。セクシュアリティは私たち人間にとって非常に重要な問題であるにも関わらず、泌尿器科などの場面を除いて、なかなか真剣に取り扱われてこなかったと思われる。とくに「強く、逞しく」という価値観の男性文化の中では、性的なことを語るのはいわゆる「猥談」くらいしか許されてこなかったのかもしれない。男性がセクシュアリティについて悩んでも、他人に語るのは恥とされ、セクシュアリティ関する悩みを持つこと自体が恥とされてきたのではなからうか。

こうした内容は、男性から女性援助者に対しては非常に打ち明けづらい。単に恥ずかしいという思いがあるかもしれないが、自分がセクシュアリティの悩

みを抱えているというのは重大な「男の弱み」であり、そのような弱みを女性に打ち明けるのはもってのほかという意識を持つ男性も多い。女性の援助者が対応すれば、いわゆるセックステレフォンとして扱われてしまうこともある。

筆者たちのような男性の援助者が聴く場合、同じ男性同士として、当事者性をもって聴くことができる。つまり、セクシュアリティに関する悩みは、男性が男性の悩みを聴くというスタイルが有効に作用している代表的な相談内容といえよう。確かにセクシュアリティについて真摯に向き合うことは援助者にとっても気恥ずかしい思いもあれば、聴きにくさもある。しかし、一人の男性がセクシュアリティについて悩んでいることを真摯に傾聴していくことは他の相談と何ら変わりないと思う。

性的マイノリティ、性犯罪などセクシュアリティに関する男性の社会病理や行動上の問題がますます注目されるようになってきている現在、一般論や伝統的な心理臨床モードだけでは対応しにくい相談が多くなってきているように感じる。セクシュアリティに関してはその典型であり、こうした相談に出会うと一見困惑もするが、男性援助の本質に出会うこともできる。うまく対応していくためには男性ジェンダーを意識した援助（Men's gender Sensitive Approach：MSA）の視点も必要であろう。

（文責：坊 隆史）